

【使徒書日課】ヨハネの手紙一 2章1～11節

¹わたしの子たちよ、これらのことを書くのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。たとえ罪を犯しても、御父のもとに弁護者、正しい方、イエス・キリストがおられます。²この方こそ、わたしたちの罪、いや、わたしたちの罪ばかりでなく、全世界の罪を償ういけにえです。³わたしたちは、神の掟を守るなら、それによって、神を知っていることが分かります。⁴「神を知っている」と言いながら、神の掟を守らない者は、偽り者で、その人の内には真理はありません。⁵しかし、神の言葉を守るなら、まことにその人の内には神の愛が実現しています。これによって、わたしたちが神の内にいることが分かります。⁶神の内にもいつもいると言う人は、イエスが歩まれたように自らも歩まなければなりません。

⁷愛する者たち、わたしがあなたがたに書いているのは、新しい掟ではなく、あなたがたが初めから受けていた古い掟です。この古い掟とは、あなたがたが既に聞いたことのある言葉です。⁸しかし、わたしは新しい掟として書いています。そのことは、イエスにとってもあなたがたにとっても真実です。闇が去って、既にまことの光が輝いているからです。⁹「光の中にいる」と言いながら、兄弟を憎む者は、今もなお闇の中にいます。¹⁰兄弟を愛する人は、いつも光の中におり、その人にはつまずきがありません。¹¹しかし、兄弟を憎む者は闇の中におり、闇の中を歩み、自分がどこへ行くかを知りません。闇がこの人の目を見えなくしたからです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 14章1～11節

¹「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。²わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。³行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。⁴わたしがどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている。」⁵トマスが言った。「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません。どうして、その道を知ることができのでしょうか。」⁶イエスは言われた。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。⁷あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父をも知るようになる。今から、あなたがたは父を知る。いや、既に父を見ている。」⁸フィリポが「主よ、わたしたちに御父をお示してください。そうすれば満足できます」と言うと、⁹イエスは言われた。「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっているのか。わたしを見た者は、父を見たのだ。なぜ、『わたしたちに御父をお示してください』と言うのか。¹⁰わたしが父の内におり、父がわたしの内におられることを、信じないのか。わたしがあなたがたに言う言葉は、自分から話しているのではない。わたしの内におられる父が、その業を行っておられるのである。¹¹わたしが父の内におり、父がわたしの内におられると、わたしが言うのを信じなさい。もしそれを信じないなら、業そのものによって信じなさい。

「わたしの父の家には住む所がたくさんある」

今日、五月の第二日曜日は「母の日」ということで、教会学校でもプレゼント用のフラワーアレンジメントを造る活動をいたしました。「母の日」は、教会行事そのものというわけではありませんが、もともと一人の女性信徒が教会で亡き母の記念の会を行ったことから始まりましたので、教会の交わりの中でも大切にされてきました。

わたしたちは、皆が「母」になるわけではありませんが、必ず「母」から生まれてくる者です。事情があつて「母」を知らずに育つこともあるかもしれませんし、「母」を知っていても関係が断たれてしまう場合もあるかもしれません。そうであっても、「母」から生まれてきたという事実は、決して否定されることはないでしょう。自分を産み落としてくれた「母」が必ず一人いるのです。そのような「母」があることを憶え、たとえ今その「母」と対面できないとしても、その「母」の存在があることを神に感謝する。そのようなときがわたしたちの信仰生活の中にしっかりと位置を与えられることも、大切なことではないでしょうか。

教会では、自分が洗礼を受けた教会のことを「母教会」と呼ぶことがあります。洗礼によって、わたしたちは「キリスト者として新しく生まれる」のです。もちろん、孤児として生まれるわけではなく、「父なる神の子」として生まれさせていただくのです。そして、そのとき、一人のキリスト者が生まれ出てくるために「産みの苦しみ」を引き受けるのは教会です。生れ出てくる者が独りで苦しみを引き受けても、生まれてくることはできません。「母」となる者が産みの苦しみを引き受けるから、新しい命は誕生するのです。

もっとも、わたしたちは、そのことをあまり実感として受けとめていないかもしれません。わたしたちキリスト者を苦しみをもって産み落としてくれる「母なる教会」とは、わたしたちキリスト者の群れであるばかりでなく、「ご復活されたキリストの御体」だからです。わたしたちは、「二人または三人がわたしの名によって集まるころには、わたしもその中にいるのである」(マタイ 18:20)との主イエスの約束に従って集まり、教会という群れに連なっています。そこにキリストがいらっしゃるので、教会は「ご復活されたキリストの御体」です。だから、誰よりもまずそのキリストが苦しみをお引き受けくださっているのです。

今日の福音書で、主イエスは、「わたしの父の家には住む所がたくさんある」と言われ、そこはわたしたちのために用意された場所だとお教えになられています。この御言葉は、ご葬儀に際しても読まれるので、「父の家」というのは死んだ後に行く「天国」のことだと考えることが多いかもしれません。そのような意味も含まれるでしょうが、主イエスがここで「父の家」とおっしゃられているのは、おそらく、ご自分が死んで復活なさった後に、なお弟子たちが留まり続ける集まり、復活の主イエスが現れてくださるのを待ちつつ共に歩み続けた教会のことなのです。そこは、かつて限られた弟子たちだけをお連れになられていた主イエスの弟子集団のように限られた者のためにだけ用意されたところではなく、多くの者のために用意された場所です。復活の主によって用意された場所なのです。

「その道をあなたがたは知っている」

ヨハネ福音書によると、主イエスは、御業の活動の初めの頃に、神殿から商人を追い出されるということを為されました。そのときに、「三日で建て直して見せる」（ヨハネ 2:19）と言われた「神殿」のことを、主イエスは「わたしの父の家」（ヨハネ 2:16）とお呼びになられていました。今日の福音書日課で「わたしの父の家」と言われたのと、ほぼ同じ言い方です。その神殿の出来事の意味を、弟子たちは、最初分からなかったのですが、主イエスが死んで復活なさった後に自分たちの集まるところに現れてくださったときになって、その「神殿」とは「キリストの御体」のことだと理解したというのです。弟子たちの集まるところで現れてくださる復活のキリストの御体、それこそが、主イエスが新しく建て直して、わたしたちのために用意してくださったという「父の家」だ、ということです。

ヨハネ福音書をさらに遡ってみると、主イエスは、弟子たちを召し集められて、御業の活動をお始めになられるというときに、こういうことをおっしゃっています。「はっきり言っておく。天が開け、神の天使たちが人の子の上に昇り降りするのを、あなたがたは見ることになる」（ヨハネ 1:51）。あの「ヤコブのはしご」（創世記 28 章）の出来事を思い起こさせるととても不思議な光景です。そこで、主イエスは、わたしたちが主の御業の結果、天が開けて天と地が結ばれた新しい現実を見るようになる、とおっしゃられているのです。

主イエスが今日の福音書日課で「父の家」とおっしゃられているところも、主が行かれてわたしたちを導き入れてくださるといふところも、そういうところなのでしょう。そこは、生と死ということによって分けられた向こう側の世界のことでもないし、天と地という物理的に隔てられた向こう側の世界のことでもない。むしろ、向こう側とこちら側を隔てていたものが取り払われた、新しい現実こそ、主イエスがわたしたちを迎えてくださるといふところ、「父の家」なのです。

けれども、主イエスに従う弟子の集まり、つまりわたしたち教会の集まりが、そのような「父の家」であり、今や天と地をつなぐ「復活のキリストの御体」そのものだと、皆さんは、思われないかもかもしれません。「とても、そんなところとは思えない」とお考えになるかもしれません。洗礼を受け、教会に加えられていても、いいえ、加えられているからこそ、教会の現実を、わたしたちは知っているのです。「ここが天と結ばれたところだといふのならば、礼拝でもっと聖いもの、もっと貴いものに触れさせてほしい。しかし、現実はどうか。讚美は疲れるし、説教は弱々しい。どこで天の聖さに触れたらよいのか。どこの教会に行けば、そのような聖い礼拝にあずかることができるのか」と、わたしたちは皆、心の中で呟くことがあるのではないのでしょうか。

弟子たちも、そうだったのです。トマスは、「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません。どうしてその道を知ることができるでしょう」と問いました。フィリポは、「主よ、わたしたちに御父をお示してください。そうすれば満足できます」と言いました。彼らは、そのとき、不満だったのです。満足できなかったのです。口に出さなかった者たちも、心の中で呟いていたのでしょうか。

「既に父を見ている」

わたしたちに必要なことは、何なのでしょう。主イエス・キリストを見ることだけではないでしょうか。結局、主イエスは、弟子たちに、そのことだけをおっしゃられたのです。「道がわからない」というトマスに対しては、「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」とおっしゃられました。「御父を示してくださいれば満足します」というフィリポに対しても、「…わたしが分かっているのか。わたしを見た者は、父を見たのだ」とおっしゃられました。主イエスは、弟子たちに、ご自分を見ること、ご自分にとどまることだけを、お教えになられたのです。

わたしたちは、今日もここに、主イエス・キリストを見るために集まっているのです。主イエス・キリストを見つめ続ける歩みから離れてしまわないようにと、ここに集められてきているのです。何かそれ以外のものを得るために、教会の営みを続けているわけではありません。教会というところを、自分が欲しいと思っていたものを満足と与えてくれるところに造り上げようとしているわけでもないのです。わたしたちは、ただ、わたしたちの集まるところにおいでくださっているという復活の主イエス・キリストを、ここで見ようとして、見つめ続けようとして、否、事実見ることができるという信仰をもって、教会の働きを共に担い合っているのです。

復活の主イエス・キリストは、わたしたちの集まっているここで、そのお姿を現してくださいます。わたしたち一人ひとりが、主イエスを信じて、主イエスと結ばれていることを信じて、主イエスの御言葉を語り、御業を行う者とされているからです。わたしたちは、自分のことを、そういう者だと自信をもって主張することはできないかもしれません。けれども、この集まりに加えられ、周りに共にいてくれる、信仰によって家族とされた教会の兄弟姉妹方を見て、そこに主イエスのお姿を見ることはできるはずです。皆、洗礼によって主と結ばれた一人ひとりなのです。だから、そう信じるのです。

弟子たちも、そう信じるようにと、主イエスに教えられたのです。「わたしを見た者は、父を見たのだ」と、主イエスはお教えになられました。「わたしがあなたがたに言う言葉は、自分から話しているのではない。わたしの内におられる父が、その業を行っておられるのである。わたしが父の内におり、父がわたしの内におられると、わたしが言うのを信じなさい」。

そうおっしゃられた主イエスが、復活された方として、わたしたちの内にもおいでくださっていると、わたしたちは信じてよいのです。そう信じるように教えられているのです。だから、主を愛し、主を信じるわたしたちは、今ここで隣りにいる兄弟姉妹方を愛し、信じるのです。主イエスだけを見つめ、キリストの内にとどまり続けようと願うならば、わたしたちは、復活の主と結ばれた兄弟姉妹を見つめ、この交わりの内にとどまり続けるのです。周りの雑音に心を騒がせる必要はないのです。ただ、信じるのです。主の御言葉を信じ、主の御業を信じるのです。御父の御光が、わたしたちすべての者を包み込んでくださっています。